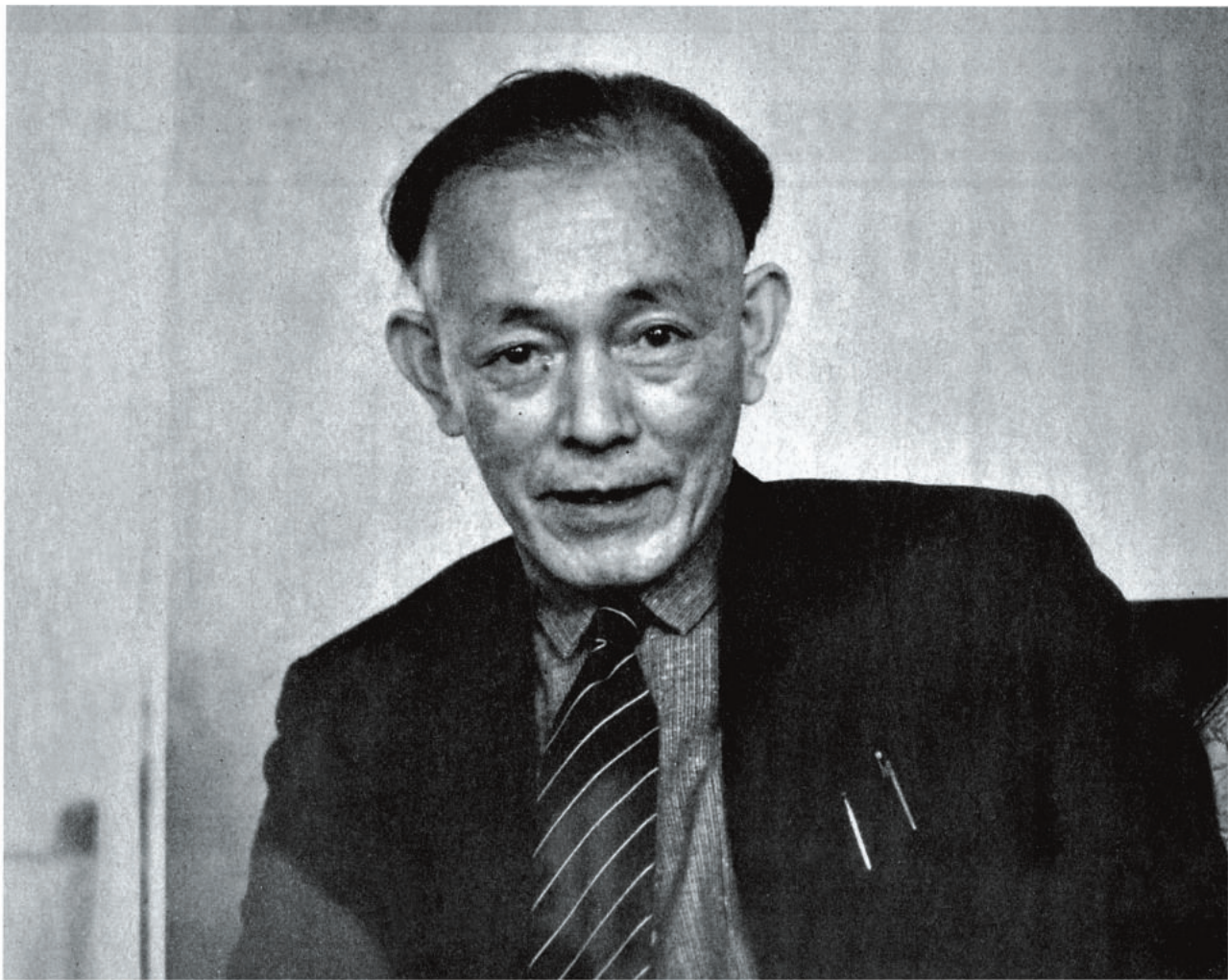


やまがた再発見

533. 佐藤十弥 ①

エッセイスト 高橋 まゆみ



多彩な才能でふるさとの文化を発展させた佐藤十弥＝コマツ・コーポレーション提供

惜しみなく力を注いだ 仕事の数々は、酒田の文化の 担い手役ともなっていた。

多彩な才能 時代をけん引

父の職業を問われた長女の田中倉子さんは、問いをそのまま父佐藤十弥になげかけた。詩人、商業美術家、装幀家、舞台演出家、画家……。さまざまな分野に携わっていた父の職業に、どれが当てはまるのかと戸惑ったからだった。父は「グラフィックデザイナー」と答えた。仕事のすべてを統括して、自分を称したのである。

このエピソードは、筆者にとつて意外であった。在京中、カトリック詩人たちと「飾画」を刊行していた十弥の根底にあるのは「詩人」だと思っていたからである。

昭和30年代から50年代にかけて、酒田には「三佐藤」と呼ばれる3人がいた、1人は佐藤十弥。グラフィックデザイナーで、釣りや麻雀など遊びの達人でもあった。2

人目の佐藤三郎はジャーナリスト、文人であり、若き日に写生や雑談を交わした天折の画家小野幸吉(酒田市)と幼



十弥の創造力が詰まっているような書斎＝本間美術館提供

【佐藤十弥(とらふ・とらや)】1907(明治40)年6月26日、酒田市伝馬町に生まれる。父は産婦人科医の広、母は市代。9人の兄、姉がおり、10人目の子どものため、十弥と名づけられた。酒田中学校(現酒田東高)の一期生として入学するが、中退し上京。東京神田の錦城中学から法政大仏文科へと進学したが、中退する。浅草のエノケン一座で舞台装置などを担当後、雑誌に転職した。35(昭和10)年に帰郷、看板屋や映画館の中央座宣伝部などで商業デザインを担いつつ、文芸活動・宣伝美術に関わる。酒田のマルチなグラフィックデザイナーとして時代をけん引した。57(同32)年以降、佐藤公太郎が発行する「みちのく豆本」の装幀を、加藤十恵門下による市民オペラ「ミカド」「つづらなるもの」など。

なみであった。そして、3人目が茶道と将棋を愛し、「みちのく豆本」の版元となった佐藤公太郎だった。いまでは、地元でも存在したことを知る人が少ない。同世代の彼らが独自の美学を融合して形づくった、往時の酒田文化の軌跡をたどってみよう。

14人の大家族

佐藤十弥は、1907(明治40)年酒田市に生まれた。実家は産婦人科の開業医。上に兄と姉が9人いて、10人目として生まれたことから「とらや」と名付けられた。若い頃は「じゅうや」と呼ばれることもあった。「十」の字は、恰も十字架のやうに少年の手枷足枷となった(詩集「私の紋章」)。消毒液の匂いが漂う病院という環境、14人という大家族の中で、十弥は成長した。「長男が医学校を出し開業を前に急逝し/父母の無常の念が/家中を深い霧のやうに包んだ」(同)。兄4人、姉3人

を次々と見送った。こうした生い立ちが、彼の生涯の重要低音となったのではないだろうか。十弥は酒田中学校(現酒田東高)に二期生として入るが、東京神田の錦城中学に転校、法政大に進んだ。大学で仏文科に在籍したのは、フランスの詩人ジャン・コクトーへの憧憬があったからであろう。コクトーは小説、脚本、評論と幅広い分野で才覚を現し「芸術のデパート」とも呼ばれていた。コクトーが来日した折、十弥は滞在先の帝国ホテルを訪ねたが、会うことはかなわなかった。それでも

コクトーは、彼の生涯の意識に存在し続けたのだろう。大学時代の同級生に、伝統芸能演出家として活躍する安藤鶴夫、のちに読売新聞副社長となる原四郎がいた。酒田を幾度も来訪した安藤とは、生涯絶えることのない交流が続いた。フランス文学を学んだ十弥だったが、法政大を中退、浅草を拠点に喜劇を上演した「エノケン一座」で舞台美術を担当した後、雑誌社に勤めた。十弥はこうした関わり合いの中で、舞台演出や編集の基礎を吸収していった。多感な年頃の10代から20代までを過ごした東京で、十弥は何を求め、何を思いだそうとしたのだろう。没後、仲間たちによって刊行された詩集「絵と詩」の中に、十弥が当時目にした光景が描かれている。「ある雨の日/一人の朝鮮人が/お巡りに/ひかれて行った」。この一節には、弱き者に向ける哀しいまなざし、幼い頃から彼の心に影を落としてきたものが重なるように見える。震災や戦争、激しい西洋文化の流入……。混沌とした時代に翻弄される

商店街を彩る

1935(昭和10)年、十弥は酒田に戻った。ふるさとの酒田では得ることのできない体験や刺激が、帰郷後の斬新な仕事に反映されていくのである。映画館の中央座の宣伝部に所属する一方で、7人の同人による「骨の木」を発行。43(同18)年まで刊行された計30冊は、回を重ねるごとに反響を呼び、全国的に知られる文芸誌として注目される。吉井勇、井伏鱒二、室生とみ子(室生犀星の妻)らの寄稿も載せられた。和綴りに、中川一政の手による表紙デザインという造作だった。

日々を過ごしたのではない。20代で制作した十弥の絵画作品が、本間美術館(酒田市)で開かれた彼の遺作展で展示されている。装幀家の菊地信義は「日本近代美術の解説されない暗号として酒田に寝る」と紹介。十弥自身は「二十代の夢の多くは地獄絵図にも似て暗く悲しいものだった。戯絵を描くことが救いだった」と付した。

さらに、菊地は「大正から昭和へ日本近代化のひずみが文化、芸術にもおよんで、価値観がゆらぎ不安定な時代。(略)少年期の境遇や体験で

形成されたアンビヴァレンスな性向をもつ青年にとつて、何らかの自己表現で身を立てようとすることは二重の困難を背負うことになる。十弥さんは戯絵の内に己ととも時に代をも封印した」と評している。大正から昭和にかけて過ごした東京時代を十弥は「優雅な一種の自己放擲」と記している。

「誰が此の扉を叩く鍵を持っていてるのである。鍵は黄金である必要はないが、錆びついてないことが肝要だ。」十弥の持つ鍵が、ふるさとの扉をいくつも開けていくので



十弥ら7人の同人で発行した文芸誌「骨の木」
＝酒田市立光丘文庫所蔵